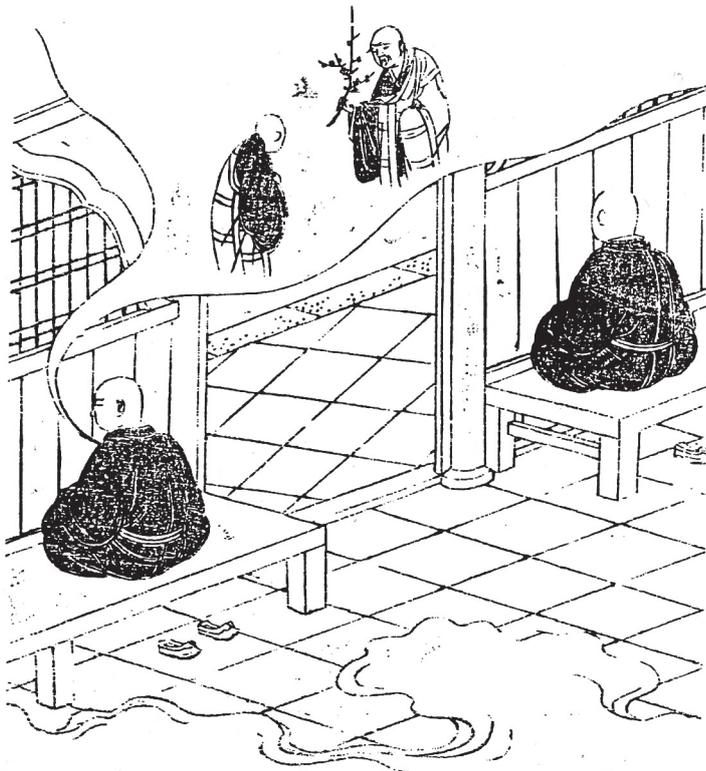


大梅山ノ
且過ニテ
靈夢ヲ
感シ玉フ



大梅山の靈夢

因了

道元禪師が中国で修行中の出来事。大梅山護聖寺に立ち寄った道元禪師は坐禅室で一夜を過ごされた。と、夢中に護聖寺の御開山・大梅禪師が夢に現われ、梅花を一枝授けてくれた。近い将来真実の教えに出会うことになろうという吉兆である。はたして後日、道元禪師は生涯の本師・如浄禪師にめぐりあう。道元禪師が終生こよなく愛された「梅花」。梅花流命名エピソードの一つである。

平成15年1月28日
第20号

発行 梅花流師範・詠範の会
会長 柴田弘一
題字 初代会長・故加藤信三師

梅花流師範・詠範の会事務局
五城目町 待月院 嶋森憲雄
電話 (0188-52-9566)

全国奉詠大会大館開催を控えて



秋田県梅花流師範・詠範の会 副会長

大館市 温泉寺住職 佐藤舜英

樹海ドームができて以来、「秋田県でも全国大会を」の聲が高まり、ついに実現することになった。地元の一員としては喜ばしい反面、不安も尽きない。交通体系、駐車場、昼食業者等は大丈夫か。前日から三日間通しての宗侶・寺族の手伝いは必要な人員が集まるのか等。

もちろん、本庁では専門のイベント会社に依頼して調査済みと聞いており、開会時刻も広範囲の宿泊施設を利用できるように通常より一時間遅くして対応するようですし、市当局もドームでの種苗交換会やスマップ等の公演で、自信を持って歓迎の意向なので、不安もだいぶ解消されつつありますが。いずれにしても私どもにできることは、全面協力して、全国からお出でいただく梅花の仲間にも、思い出に残るような大会になることを祈るや切である。また、この機会に梅花講未設置の寺院の方々にもお手伝い、あるいは見学いただき、県内梅花講の拡大に繋る大会であってほしいと思う次第です。

ちよつとぶじよぼう

梅花 づれづれ

成 長 記



【緊張の初登壇】龍門寺講・徳正寺講・香最寺講・霊仙院講とともに
最前列中央、向かって左側が筆者

東成瀬村 龍泉寺副住職 森田英俊

生後九ヶ月から十ヶ月の赤ん坊は“はいはい”や“つかまり立ち”を始める頃なのだそうです。平成十四年二月二十五日、大量の雪に囲まれた本堂で『龍泉寺梅花講』はお釈迦様に見守られながら「オンギャー」という産声とともに？誕生したのであります。

梅花不毛の地と言われる久しい県南の地での誕生までには「梅花に興味をもってもらえるのだろうか、本当に人が集まるのだろうか」等々、不安もたくさん有りましたが、“案ずるより産むが易し”開講式には九名の勇者が集まって下さり「ホッ」としたのであります。

「よし、がんばるぞー！」そしてその後。すすくと講員様も増え、現在二十五名となりました。

「思えば父母なる諸々のご縁」師範の方々の指導や講へのアドバイス、詠範の方々の励ましの言葉、教範の方々は私の未熟な指導に真剣に耳を傾けて下さった。特に師範養成所、研修員の四年間、主任講師としてお世話になりました金足東泉寺の柴田弘一先生には、お唱え作法はもちろん、大切な梅花流の心を教えて頂きました。本荘長谷寺の浅田高明師範には同期として学んだご縁で、講活動の様々な面でお世話になりました。また住職の理解があったおかげで開講

出来たのだし、近隣御寺院様も温かく見守って下さっています。書き連ねればきりがないほど、様々なご縁に支えられていることに深く感謝しています。

さて、初めてづくしの一年を振り返ると、二月に開講以来、六月の龍泉寺地藏大祭では、初めて大勢の方を前にしての「三宝御和讃」。初めて聞く御詠歌に「何が始まったの？」といふおかしげな表情の方もちらほら。しかし法要後の「とても良かったですよ」の声は皆の励みとなりました。七月、本荘長谷寺様に行き交流講習、下旬には特派講習の会場も受けることが出来ました。そして特に印象深い九月七日の県大会での初参加初登壇は「三宝御和讃」法具なしのお唱えでしたが、大緊張の中、大きな声でひたすらのお唱えも無事終了。帰りのバスの中で祝杯のビール味の味と講員さんの笑顔が素敵でした。その後九月には検定、十月には一泊講習会とワクワクドキドキ初めてづくしの一年でした。

これからも「お誓い」にありますように、正しい信仰を持ち、仲よく明るくをモットーに、一歩一歩同行同修学んでいきたいと思っています。

『梅花流五十周年』という記念の年は、個人的にも講の開講、三級師範検定、宗務所講師の拝命、全国大会のスタッフと本当に梅花三昧の一年でした。そして、いよいよ秋田での全国大会！春暖かき五月には大館樹海ドームに新たな喜びが私達を待っています。

受話器から響こえる梅花のしらべ

テレビホン梅花

800-88737676

一月	二五日	誕生(高祖)
二月	一日	紫雲(太祖)
	八日	涅槃御和讃
	一五日	不滅
	二二日	高嶺
三月	一日	溪声(総持一)
	八日	彼岸御和讃
	一五日	香華
	二二日	無常御和讃
	二九日	月影
四月	五日	花祭御和讃
	一二日	花供養御和讃
	一九日	菩提(太祖)
	二六日	法灯(太祖)
五月	三日	永光(永平二祖)
	一〇日	永光(総持二祖)
	一七日	同行御和讃
	二四日	妙鐘
	三一日	報謝御和讃

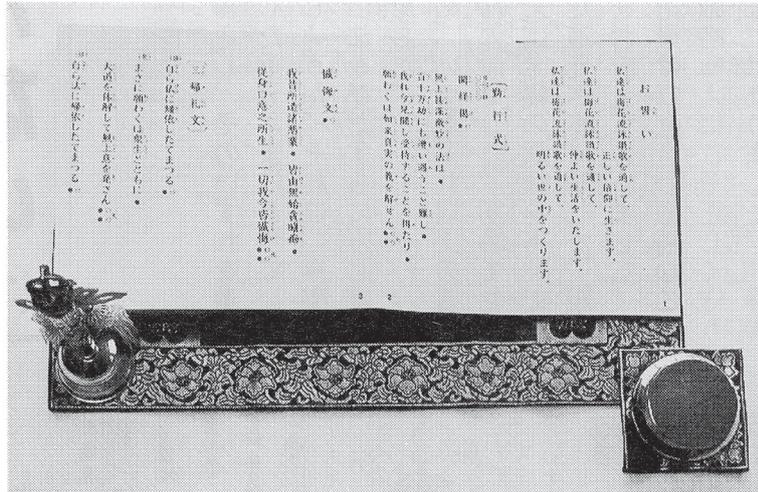
※ご意見、ご感想をお寄せ下さい。
010-0111 秋田市金足岩瀬字前山三
東泉寺(0118-8737675)

写真で見る基本作法

(その7) 新教典による勤行式作法

歌詞改訂で梅花流詠歌教典も新しくなりました。これによってお作法の上でも変更になった点があります。今回はその中でも大きく変わった「勤行式」作法についてまとめました。なお、紙面だけでは十分に伝わらないところがあると思います。細かい点は各師範・詠範のご指導を仰いで下さい。

旧教典の場合、勤行式は二ページ開きでしたが、新教典では四ページ開きとなります。

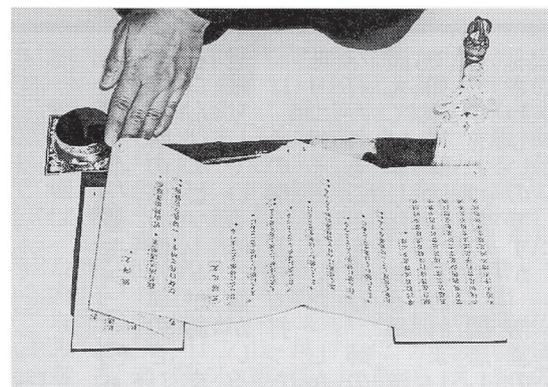
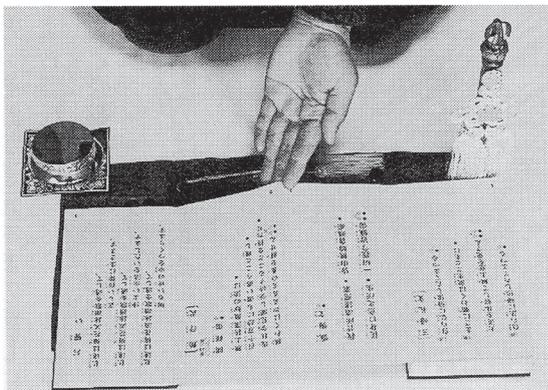


1 教典は四ページ開きです

勤行式の教典のあつかい

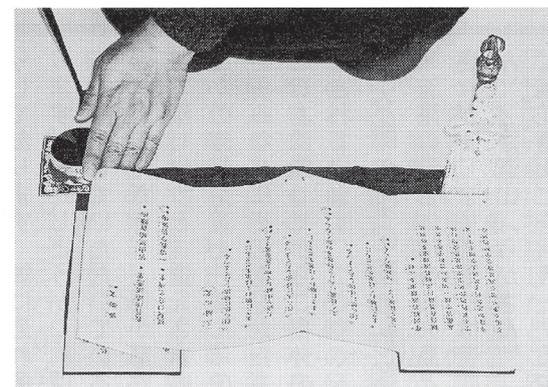
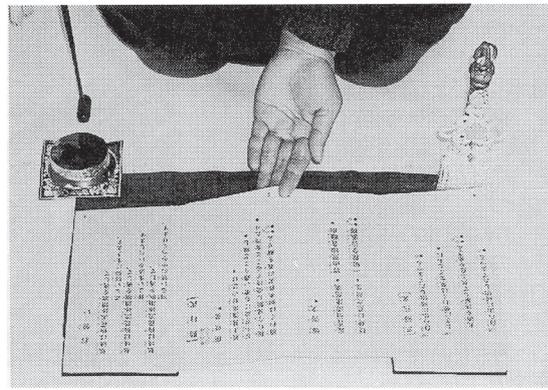
【詠衆】

右手は片手合掌のまま左手で行なう



【勤行司】

右手は撞木を定位についたまま左手で行なう



2 教典をくり開く手は勤行司・詠衆とも左手で行ないます

くり開き方 1) 左側のひらをななめ上向きにして、教典下端の中ほどを人さし指と中指ではさみ
2) てのひらを伏せる形でくり開く

※旧教典二ページ開きの場合、詠衆は右手で行なっていましたが、これも左手に変更となります。

絵図でつづる

道元禅師

ものがたい(3)

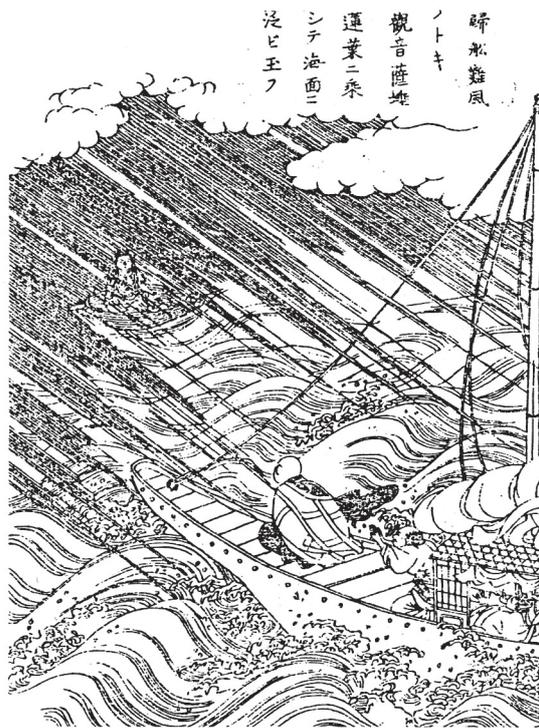
帰朝

栄達への道、情愛にふける暮らし、そのいずれを選ぶことも捨てて仏の道に身を投じた道元さまにとって、幸せとはいったいなんだっただでしょうか。それは、真実のお師匠さまのもとで、正しい仏法をひたすらに行じ続けてゆくことにほかなりませんでした。

その思いをしつかり受けとめ、いつもそれ以上の答えを示し続けてくれたのが、如浄禅師でした。初めてお二人が出会われて以来、道元さまは全幅の信頼を寄せて如浄禅師に仕え、如浄禅師はまた道元さまに対して、親しく、厳しく、惜しみなく正法をお伝え下さいました。大宋国の仏教界でも如浄禅師の指導はひととき厳格なことでも知られていました。しかし厳格ゆえにこそ正しく守り伝えられてきた仏の家風がそこにはありました。如浄禅師の会下で修行に励む毎日、道元さまにとって宝物のように得がたい日々なのでした。

やがて天童寺を辞する時が来ました。これまでいただいた大恩に報いるためには、今度は自らが師となつて、あやまりなく本當の仏法を伝えていかなければなりません。日本に帰り、いまだ混迷の中にある人々の心に、本

當の教えを伝えること、それが道元さまの新しい使命となったのです。じつはお別れの時、お二人は如浄禅師の余命いくばくもないことを察していました。天童寺を離れることは、お二人にとって今生のお別れなのでした。如浄禅師のご訃報が届いたのは、道元さまが帰国して間もなくのことと考えられています。



崎波難風
ノトキ
観音菩薩
蓮葉三衆
シテ海面ニ
泛ビ玉フ

開堂

安貞元(一二二七)年、帰国した道元さまが、初めて行なったのは『普勸坐禅儀』の執筆でした。それは正しい坐禅をひたすらに行じることが、そのまま仏法だということを書いたもので、古来いくつかの修行方法の一部として考えられていた坐禅を、それだけで直に完全な仏行であると主張した画期的なものでした。もちろんその考えは今も亡き如浄禅師のもとで養われたものでした。

道元さまひとくちメモ

★天童寺での日々★

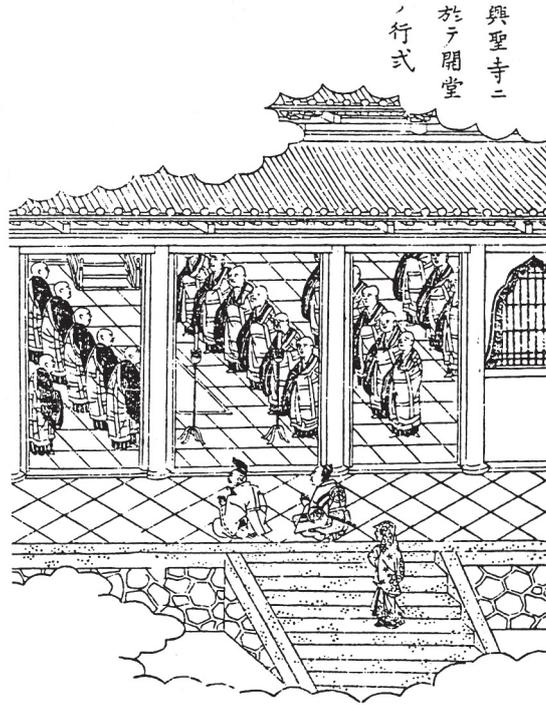
如浄禅師の修行僧指導のきびしさを物語るこんなエピソードがあります。僧堂で居眠りしている修行僧がいると、如浄禅師は、その僧を履物で打ったり、きつく叱りつけるものでした。しかし僧達はみな打たれることを喜び、師のきびしさを讃えていました。ある日、法堂での説法で如浄禅師はこう言われました。「私はもう年をとったので、閑居しているのがふさわしいのですが、僧堂の指導者という立場のために、みんなの迷いを破り、住持として叱ったり、竹箆で打ち据えたりしております。誠に恐れ多いことでもあります。しかしどうかこれは仏に代わって行なわせていただいている指導と受けとめていただき、どうか慈悲をもって許してほしい」と。道元さまは、天童寺でほかの修行僧達と一緒にこの言葉を聞き、みな共にそのありがたさに涙した、と日本に帰ってからご自分の弟子達にお話されています。

★嵐の中に現れた観音様★

寧波港の沖合には舟山列島という小さな島々があります。そこは普陀山(ふださん)・洛迦山(らかさん)(二つあわせて補陀落山)を代表とする中国でも有名な観世音菩薩の霊場になっています。後に道元さまが自ら記された記録では、道

道元さまは、しばらくの間、入宋前にお世話になった京都建仁寺で過ごされた後、ご自分が天童寺で体得した禅林生活を修行する、新しい道場を建立することを心に誓い、京都深草の地に草庵を結びました。

道元さまの峻厳な気風と、旧来の日本仏教とは異なる清新な教えは、新しい時代の到来を渴望していた人々の心を捉えました。僧俗の信者は年々と集い来たり、ついに深草に観音尊利院興聖宝林寺（興聖寺）を建立し、日本最初の本格的な禅宗僧堂を開堂したのでした。



興聖寺ニ
於テ開堂
ノ行式

入越

興聖寺において道元さまは、僧堂を中心とした修行生活をお勤められた。真実の仏法をここに開いたのだと宣言された『正法眼蔵弁道話』をはじめ、生涯に著された百数十余の著作のうち、ほぼ半数は興聖寺在住の十年間で書かれたと言

われています。

道元さまは公家のご出身です、都には縁者の方がたくさんおりました。折しも、東福寺という大きな禅宗寺院もこの頃に東山に建立され、建仁寺とも相まって、興聖寺の周辺は新しい気運ににぎわっていたことでしょう。

ただ道元さまの胸中には今は亡き如浄禅師の言葉がくすぶり続けておりました。それは修行者に対する次のような戒めの言葉でした。「名聞や利養に近づいてはいけません。けん騒の中に居てはいけません。いつも心がけて青山や深谷を觀て、古徳の教えによって自心を照らすべきである」。都市のにぎわいの中であって、道元さまは日増しに落ち着かぬ心地をおぼえるようになっていました。

その頃、信者の一人波多野氏が、自分の領地である越前に、道元さまのお心にながう修行の地のあることをお勧めしました。熟慮の末、道元さまは門弟達と一緒に、越前志比庄へ向かうことを決めたのです。



越前松園
ノ溪ノ奥
吉峰ニ
分入り
五ノ

元さまを乗せた帰朝の船が、港を出発した後暴風に会い、航行が危ぶまれたことになりました。嵐の中、道元さまが船上に出て一心に祈禱したところ、中空に一枚の蓮の葉に乗った観世音菩薩が現れ、さっきまでの風波がウソのように静かになり、無事に帰朝することができたこと伝えられています。現在「一葉観音」として伝わる仏像は、この時の伝説をもとにして出来たものです。日本でも古来より西国三十三所観音霊場巡礼歌が「ふだらく」と呼ばれ、秋田では葬送念仏として広く行われています。この補陀落（ふだらく）信仰の始まりが、ここ寧波港沖の観音の島々なのです。

☆〇〇の国☆

天童寺は、山中に建てられた大小の殿堂を渡り廊下や階段でつないだ、まさに一山の大伽藍でした。「仏法の修行は都会のけん騒を離れ、青山深谷を觀るところがよい」と如浄禅師より教えられた道元さまは、京を離れる以前から、天童寺と同じような山深いところに新しい修行の場所を探し求められていたようです。越前・越中・越後は総称「越国」のこしくに。そこは都の鬼門・比叡山からさらに東北方へ「越えた」ところ。古来の都人のイメージからすれば、好奇心と恐怖心のまじり合う異郷でありました。その地へ道場の本拠を移そうとされた道元さま一門の気概は、なみなみならぬものがあつたことでしょう。

梅 花 流

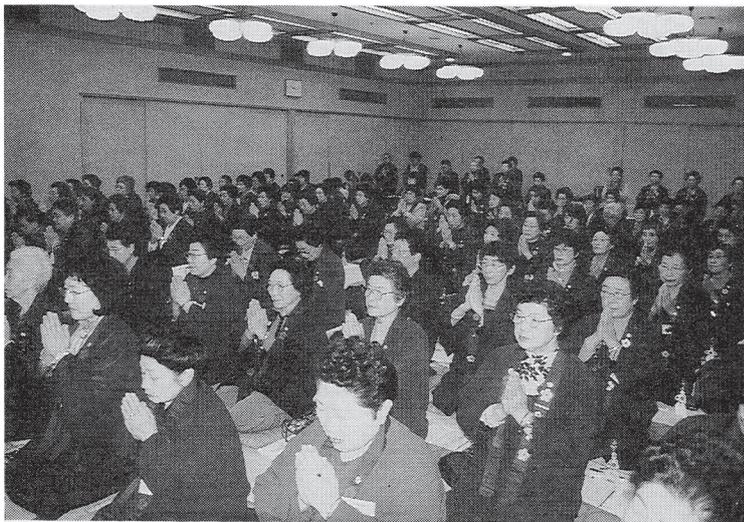
講師一泊研修会のおもいで

おもいで

ウェルサンピア(岩城町)会場 十月十七・十八日

今年の県南地区一泊研修はいつもと少しちがいました。例年はお寺を会場に寺院法要を織り込んだ研修日程ですが、今回の会場は岩城町国民年金センターウェルサンピア。眼下に日本海を一望する最高のロケーション。夏には野外プールのウォータースライダーで家族連れがにぎわいます。たまにはこんなところでのびのびやりましょう、と事務局さんのいきなはからいでした。

それでも三尊仏をおまつりした大広間での坐禅や開講式は寺院会場と一緒の緊張感。各会場はどこも明るくゆったり。夜はにぎやかなごやか懇親会。温泉大浴場で疲れを癒し、翌朝はびしっと早起き朝のお勤め。
「こういう会場もいいなあ」「でもお寺のフンキもいいよねえ」とちらほら聞こえてきます。で、結論は「やっぱり一泊研修はいいなあ」でありました。



大広間にいっぱい受講者

矢島町

龍源寺講師 佐藤アヤ子

当日、私達龍源寺講中は九名の出席で講師のご厚意により自家用車に分乗して出発致しました。天候もまずまずで、一同一寸の不安を抱きながら会場に到着。すでに多くの出席者あり、研修の大いなるものを感じました。

日程は階級に応じてプログラムも異なり、私共は何年かお習いしておりますので上手下手は申すまでもなく各師範のご指導に従いながら一日目を無事に終わりました。二日目は暁天坐禅より始まり、頭から足先まで一本の線が通るかのような緊張感でした。終生忘れることの出来ない大きな思い出となりました。

開講式の三宝御和讃に始まり、閉講式の同行御和讃でしめくくられました一泊二日の研修は、緊張の中にも和ごやかに終了いたしました。

講師先生のお計らいで慰労会が開催され、講師もすつかりほぐれ、かくし芸等披露され、すばらしきムードの中に参加者お互いに親睦を深めることが出来ました。

長いようで短かった一泊研修を受けた私共は、心の奥深くまで梅花を抱き、生涯忘れることの出来ないありがたき思い出となりました。

海望む館に研修御詠歌の
御教え深く心にきざむ

岩城町

龍門寺講師 三浦祐子

先日、梅花の一泊研修について何か書いて下さいとの突然の電話を受け、さて私みたいなまだ未熟者がと戸惑いながらも思いつくまを書きとめてみました。月二回の練習にも満足に参加できない時もありますが、長谷寺の方丈さんのご指導のもと楽しく受講しております。

ある時「今年度は年金センターにおいて一泊研修が行われるので参加してみませんか」というお話でしたので、関心もあり四人で参加してみました。

会場について参加者の多いのにびっくりに！ 全体会場で日程説明を受け各コース毎にわかれての講習。私達は初心者コース。最初は緊張しておりましたが、楽しい講習や実技指導等で徐々に緊張もほぐれて一時間、一時間があつという間に過ぎてしまいました。

夜のミーティングでは、歌あり踊りありとこれもまた楽しいひとときでした。二日目は早起きをして坐禅と朝のお勤めをし、やはり各コース毎にわかれて講習がありました。

各講師の方々の朗々とした美声とともにわかりやすいご指導で、二日間ではありましたが、充実した研修会でございます。これからも楽しみながら続けていこうと思っております。どうもありがとうございました。

寿仙寺（比内町）会場 十一月六・七日

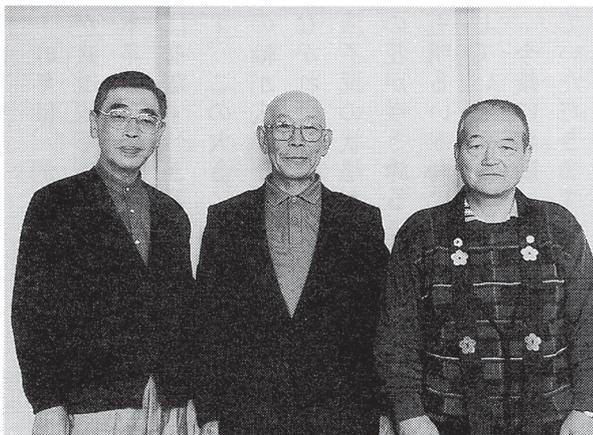
霜月の北秋田。初冬を迎えた境内は、はらはらと雪のちらつく空模様。それでも寒さの心配はとりこし苦労。木の香新しい大きな伽藍の中は暖房がゆきとどき、終始快適な一泊二日でした。県北各地から集まった講員さんは百二十七名。

ご本堂での読経、万灯供養、坐禅。応供臺と呼ばれる立派な会食場ではお作法通りの食事など、寺院会場ならではの厳粛な雰囲気、講師先生達の楽しいユーモア、熱心でいいいな講習、と、とても盛りだくさんで、みのり多い二日間でした。

初日の夜の食事はご当地名物・比内鶏 たつぶりの鶏飯弁当。二日目は寿仙寺 族様はじめお手伝いのみなさん手作りのお粥とカレーライス。いずれも大変美味しくいただきました。くわえて夜には門前の銭湯でお風呂もいただき、身も心もゆったりできた講習会でした。

寿仙寺様はじめ、会場でお世話になった皆様に心からお礼申し上げます。

さて受講者の中に男性講員が三人。県内はもちろん、全国的にも男性の参加はめずらしいのですが、いずれもたいへん熱心な受講のようす。そこで今回はこのお三人に、梅花を始められたいきさつや講習会の感想などについてお聞きしてみました。



右から相馬さん・桜田さん・木村さん

鷹巣町

浄運寺講員 相馬勝友

がっしりした体つきの相馬さん、失礼ながらとお尋ねするとお年は六十五歳。「私は護持会役員なんです、うちのお寺では梅花講員の人たちが寒中に町内を寒修行して歩くんです。で、昨年そのお

つきあい提灯を持って歩いて歩いたんですが、講員さんたちは皆で御詠歌を唱えているのに、私だけだまっついでついで、私にも教えていただくことは出来ないうでしようかと習いはじめたのが入講のきっかけです。

昨年一月から始めて、先日検定も受けました。大会や講習会に皆と一緒に参加するのが楽しいですね。

ふだん作法がおざなりになることが多いものですから、基本的なお作法をしっかりと覚えていきたいと思えます」

比内町

宝田寺講員 木村滋樹

メガネで長身、六十四歳の木村さん。「以前、両親が二年続きで亡くなったんです。そのとき妻の姉が毎晩来ては御詠歌を唱えてくれて心動かされました。

最初に御詠歌を聞いたのは十五年前のことです。高校時代の同級生が亡くなった会葬に行ったんですが、鷹巣町の龍泉寺さんでお葬式だったんです。その時講員さんたちのあげて下さったご詠歌が、本堂のあちからもこっちらもわきあがるように聞こえて、すばらしいものだなあと思っていました。梅花講の仲間に入れていただいたのは昨年の二月で、検定は二回ほど受けました。

私もお作法のことですが、こうしたよそのみなさん達と一緒にの研修会では、他講の講員さんからも、ちよつとしたアドバイスをいただくことがあって、それがありがたいですね。それに他の人の所作を見て勉強になることがたくさんあります。それと今回だけじゃないですけど、お唱えの練習ばかりじゃなくて、いろんな仏教のお話を聞けるのがいいですね」

森吉町

浄福寺講員 桜田勝夫

ややご年輩のいつも明るい笑顔。まわりの女性講員さん達にもおなじみ、七十二歳の桜田さん。

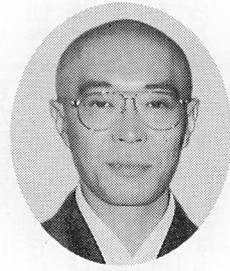
「私の家内が十三年前に亡くなったんですよ。もと梅花講の講員だったんです。で、講員のお仲間だった人達が供養のお唱えに来てくれたんですね。

当時は私も出稼ぎで家にいないことが多かったんですが、家内を亡くした寂しさというか、家に独りになってしまい、まわりの人達やお寺さんからも勧められて梅花講に入れていただいたんです。はじめは女性ばかりの中にも男ひとりですしやりづらかったんですけど今はなれました。もう六年目になるんですよ。このあいだ五回目の検定を受けました。あ、すると水色になるんですか。

研修会にはこの何年かずつと参加させていただいています。そうすると『桜田さんこんにちは。お元気でしたか？』と顔見知りになった人たちが声をかけてくれるんです。それがうれしいですね。大会や講習会でよその講員さんたちと顔を合わせる度にあいさつを交わし合っていて、友達が増えてゆくようでもううれしいですよ。今度はこうして私以外の男性の方も増えたので心強いですよ。こうやってだんだん男の人たちも入ってきてくれるといいですね」

秋田県宗務所 **新** 梅花主事ごあいさつ

「梅花流全国奉詠大会」開催



西目町 円通寺住職 近藤俊貞

周知のごとく、平成十五年度「梅花流全国奉詠大会」が、大館市「樹海ドーム」で開催されます。

秋田県開催にあたっては、前秋田県宗務所長・亀谷建樹老師をはじめ、師範・詠範の会、また多くの檀信徒講員の悲願でありました。この願いが、来る五月二十八日・二十九日の両日にわたり成就しようとしております。

現在、県内の参加は九十二講、千七百余名の講員となり、また大会を支える大会役員としての協力者も百名ほどの申し込みがありました。

全国各地から来秋される講員さん達に、心から喜んでもらえる大会にしたいと思い、本庁詠道課の指導をいただきながら、小委員会を結成し、着々と準備を進めているところであります。

幸か不幸か(?) 柴田先生(秋田市東泉寺)を代表とする県内師範有志の「烏合衆」という心強い(口のうるさい?)仲間もおります。必ずや大盛會裡に円成するようがんばる所存です。

昨年は、創立五十周年の記念大会が武道館で盛大に開催されました。本年は、その節目から梅花流がさらに飛躍すべき第一歩の大会であります。この大会によって、県内の梅花の輪が広がり、講員さんの増加につながればと思います。また昨今は経済不況の状態が続いております。梅花の花が咲き誇ることにより、少しでも明るい方向に進んで行くことを念じている次第であります。

今後四年間、梅花主事を勤めさせていただきます。前本間主事同様よろしくご指導、ご協力下さいますようお願いいたします。

禅センター！梅花講習日程



宗務所禅センター主催・平成十五年三月までの梅花講習日程をお知らせします。

【宗侶・寺族研修会】

二月十七日(十時半～十五時半)

講師 細谷裕昌師範

課題 地藏菩薩御和讃・慈念

【檀信徒講習会】

二月十三日(十時半～十五時)

講師 葛谷達徳師範 佐藤俊晃師範

課題 法灯・澄心

三月十四日(十時半～十五時)

講師 富岳正純師範 浅田高明師範

課題 追弔御和讃 妙鐘

「はじめてだけどんなものかちょっと参加してみたい」「いろんな先生の講習を受けてみたい」「うちのお寺では梅花講がないので受講してみたい」等々いろんなきっかけの方が参加されています。どなたでもお気軽にご参加下さい。

昼食は各自御持参下さい。

受講料は無料です。申込は不要です。

当日秋田県宗務所禅センターまでお出下さい。

【宗務所でんわ】〇一八八六八八七

宗侶・寺族研修会

期日 平成15年1月28日～29日



時間 28日午前9時半受付～29日午後3時
会場 秋田市宗務所・禅センター
講師 安藤英明一級師範(北海道・禅峯寺)
対象 宗侶・寺族(檀信徒講習員は参加できません)
宿泊 秋田市さとみ温泉
申込 師範・詠範の会事務局へ